

○紅谷 衆議院がオーラル・ヒストリー事業を行うことになり、初回を河野元議長にお願いすることになりました。

議長時代を振り返っていただき、当時の出来事や判断、それに關わる当時話せなかったようなエピソードがありましたら、議長在職時を中心ですが、河野洋平という希代の議長を生んだその歴史を生い立ちから辿っていく形で進めさせていただきますと思います。

議員として四十二年余り、議長としては二千二十九日という長期間の在籍でした。私は議長在任中は議長秘書と秘書課長としてお仕えしましたが、その間、イラクへの自衛隊派遣の問題、郵政解散、さらには議員年金問題、そして道路財源の両院議長裁定という大きな出来事がありました。

平成三十一年の今年は、引退されてからちょうど十年になります。当時を思い起こしていただくだけでなく、今の政治に対する感想や、これだけは言っておきたいという直言も多々あるうかと思えますので、率直にお話しただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

《河野家の系譜》

○紅谷 河野家のルーツを遡ると、四国・伊予の河野水軍に行き着くということ、日経新聞の「私の履歴書」の中で書いておられます。水軍の末裔というと海賊というイメージが強く、有名なのは村上水軍や越智水軍、紀州には熊野水軍があります。村上水軍という政治家では村上正邦さんや村上誠一郎さんがそうかと思えますが、お二人はいかにも水軍の末裔という感じがするのですが、河野先生を見ていると、水軍の末裔とはほど遠い印象です。

しかし「私の履歴書」の中では、私も父も強情で気が強いのは水軍の血が流れているからだろうとおっしゃっていますけれども、ご

自分の性格からそれを感じられることはあるのでしょうか。

○河野 僕は四国の河野水軍の伊予大三島を訪ねてみたことがあります。相当な砦があつて何度も戦い、結局は源氏に呼ばれて関東まで出てきて、源氏は鎌倉で幕府をつくるのだけれども、余り近くてはいけないというので小田原まで下がって、そこに住みついたようだね。その末裔だということだから、やはり脈々と血は流れているはずだ。

それで、自分の父のことなのですが、世間では、河野一郎というのは相当剛腕というか剛直と言われていたんだけど、昔のことを整理して振り返ってみると、河野一郎より河野謙三の方が頑固なんだね。

河野一郎というのは意外に柔軟なところもあつて、一時は軽井沢に立てこもつて自民党を離党するとか河野新党論とかをやったんだけど、それなんかも大野伴睦さんとか松村謙三さんという友人や先輩と会つて話をして、最後はそういう先輩の説得を入れて止めるんです。

ところが、河野謙三という人は、参議院改革を主張して議長選挙でもみくちやになるんだけど、この人は最後まで頑張るんです。世間では河野謙三という人は割合と柔らかな調子で兄貴とは大分違つて言われているけれども、一番近くで見ている僕からいうと、謙三という人は相当頑固だなという感じで、僕は、どっちかというところ謙三に似ているんです。ふだんは割合と柔らかな調子に見えるけれども、離党するかしないかというときには最後まで頑張つて突っ切つちやうわけです。そこは、おやじの方がむしろ、先輩や友人の意見を聞いて踏みとどまったんです。

どうも、あの頃の方が、政治家同士の友情とか、政治家同士の濃密な話合いというのがあつた。僕らの時代になると余りそういうのがなくて、表向きの友情関係というのはあつても、最後まで本当に

抱きついて心中しても引き止めてやろうというのは余りなかったし、それから、政治生活を続ける上でも、この人のことが一番という人が余りいなかったのかもしれない。

ただ、僕には鯨岡兵輔さんとか宇都宮徳馬さんという先輩がいて、それから、あの当時、僕に一番影響が強かったのは意外なことに松野頼三さんで、その人たちから相当丁寧に慰留を受けたけれども、とうとう振り切って離党したところを見ると、やはり相当頑固なところがあつて、それは水軍の血が流れているからかもしれないというふうに思いますね。

○紅谷 先生の地元の小田原や平塚辺りでは、今も水軍が由来の、河野姓は随分あるのでしょうか。ちなみに、河野姓が一番多いのはやはり河野水軍発祥近辺の愛媛、広島のようにです。

○河野 小田原や平塚にはそんなになくて、ほとんど親戚ぐらいじやないかな。

西日本の方ではカワノなんです。だから、僕が初めて入閣したときに後藤田さんが官房長官で、組閣名簿を読み上げたときに河野（かわの）洋平君と言われて、誰のことかとしばらく気がつかなかったことがありましたね。

○紅谷 今お話にもありましたが、源氏方について小田原の方に行つたということですが、鎌倉幕府の成立が十二世紀ですから、八百年余りの河野家の歴史があるわけですね。

○河野 小田原辺りで一番暴れ回つたのは北条早雲で、歴史では相当な存在感を示し、小田原城という大変な名城、難攻不落の名城を残すんです。

一方、我が家の方は、そういうのとは余り関係なくて百姓をやつていたんです。余り大した百姓じゃなかったようですが、江戸時代に二宮尊徳との縁で農業の教えを受けて、二宮さんの農業改革の仕事に、かばん持ちをしてずっとついて歩いていたらしいです。

○紅谷 それは、河野先生からいうと高祖父、河野一郎先生の曾祖父の治郎右衛門という方が、二宮尊徳のかばん持ちをしていたようですね。

○河野 そうです。弟子で付いて歩いて、いろいろ教わつて、我が家に残っている「分をわきまえ、度を過ぎずな」という家訓があるんです。分をわきまえというのは、分を越えちゃいけないと。度を過ぎしちゃいけないというのは、決めたラインを出ちゃいけないと。「分をわきまえ、度を過ぎずな」は、おやじからは余り聞かなかつたけれど、謙三さんからは結構聞かれました。

○紅谷 二宮尊徳と河野家との繋がりというのは、河野治郎右衛門さんの奥さんの妹が二宮尊徳と夫婦だったとのことですが。

○河野 これは余り大きい声じゃ言えない話だけど、二宮さんというのは女房が複数いてね。厳密に言うくと、夫婦だったのかはよくわからないところもあるんですよ。

二宮尊徳を大切にしていた時代が二十年ぐらい前まであつて、戦争前に小学校に通っていた頃は、薪を背負つた二宮さんの銅像がありましたよね。小田原に私の実家がありますけれども、小田原市の隣に豊川村という村があつて、その間に酒匂川が流れていて、その向こう岸に二宮さんの実家があつて、今でもその実家があります。今は記念館みたいになつていて、ちよつとした展示があつたりしていますね。

二宮さんは、種粃を蒔いて、米ができたなら、まず蓄える。つまり、来年の分はまず蓄えろという。米を来年の分を取つて、残つたのを売つて得たお金で飲んじゃいけない、土地を買いなさいと繰り返言われたようです。それで、高祖父は土地を少しずつ買つて、ちよつとした地主になつて村長をやつたりしていました。

だから、戦争中に僕が疎開して小田原の家に行つたときには、米倉がありましたよ。そこへ年貢米を持つてくる人もいましたね。

○紅谷 そういうこともあって、河野家というのはずっと農業に携わっていて、お父様の河野一郎先生は、朝日新聞では農業関係の担当で、後に農林大臣の秘書官を務められたのも、そういった影響があったということでしょうか。

○河野 そうだったと思います。だから、農業のことはよく知っていました。父は、終戦直後に公職追放になるのですが、何もするところがないので家へ帰って百姓をやっている以外にないんです。何の抵抗もなく百姓をやりましたね。僕らもその百姓のせがれだから農作業をやりました。

僕がまだ小学校三年ぐらいで父が追放で帰ってきて、毎朝早くたたき起こされた。行くぞと言われて、おやじの自転車の後ろに乗せられ、どこへ行くかというと自分で田植した農地を回って歩いて、水がちゃんと入っているかどうか、稲の成長具合はどのくらいか、葉っぱの色とか、それから分けつといって、一本ずつ植えたのが三本になったり五本になったりして増えていくのをチェックする。それから、夜中に変なやつが来て水門を開けられちゃうと、そっちへ水が全部行って、こっちに水がなくなることもあるものだから、ちやんと水があるか大丈夫かと毎朝確認に行く。それがまず百姓の最初の仕事でした。帰ってきて朝飯を食べて、それから田の草を取れとか何々しろとか言うから、いかげんなものじゃなくて、本当に百姓だったんですよ。

僕は、中学までは小田原の中学で、自宅から通って、さつき言ったように地主だから、その当時は農地改革の前だから、百姓は小作人がやって地主はそんなにやらないだけども、それでも田んぼの真ん中に住んでいて農業をやっていたから、百姓のことはよく知っていましたよ。

だから、自分は農家の生まれ、農家の育ちという意識はありません。

《政治家一家》

○紅谷 河野家はずっと農業に携わっていたということですが、一方では政治家一家と言われています。その系譜についてお聞きしたいと思います。

河野先生御本人はもちろんですが、祖父の河野治平さんが県会議長、お父様の河野一郎先生はもとより、叔父が河野謙三先生、さらに、いとこには田川誠一先生もいらっしやいます。ご子息は河野太郎先生ですから、本当に政治家一家と言っていると思います。

○河野 僕からいえば祖父で、一郎の父親の河野治平という人は地方政治家でした。今の東京大学、その当時の東京帝国大学農学部に行っていた農業技師になるんです。京都の農業試験場に勤務したり、養鶏業をやって県の連合会の会長をやったりして、やがて県会議員になって県会議長までやるんです。

治平は、子供の一郎と謙三を杉浦重剛という人が主宰していた称好塾という塾に預けるんです。

杉浦重剛という人は滋賀県の人で、この人がつくった学校が今も東京に残っています。今はもう普通の学校だけれども、その当時は非常に日本的というか、欧米かぶれは駄目だという主張をする人です。昭和天皇にご進講をなさっていた人でした。杉浦さんは、イギリスに留学したりして外国経験もすぐあって、外国のことなんか一切知らない国粋主義者ではなかったんです。国際的な知識を随分持っているが、やはり日本という国を大事にしなきゃいかぬというのを強く言っていた人で、その人が主宰していたのが称好塾です。そこは昔の塾だから、住み込みで行儀作法から雑巾がけや庭掃除もやっていたようですよ。

河野謙三という人は非常に真面目な人で、称好塾に入ってきた人と卒業というか、終わるまでそこで勤め上げるんですが、一郎は途

中で逃げ出したりして余り熱心じゃなかったんですが、杉浦重剛という人の影響はずっと受けていて、僕は父から天皇家に対する尊敬とか大分言われてきたから、皆さんは分かっているでしょうけど、皇室に対しては割と丁寧だったと思うんですが、それはその影響があったんです。そういう影響を子供の頃から受けていたんだらうと思いますね。

○紅谷 河野一郎先生の話がありました。河野一郎先生は朝日新聞社に入られて、農林省の担当になり、その縁で大臣秘書官から政界入りされたということでしょうか。

○河野 父は朝日新聞の農林省担当で、その後山本悌二郎という農林大臣の秘書官をしました。畜産会の幹部にもなって、愛甲豚という豚の産地である平塚から、畜産関係者をバックにして選挙に出て当選するんです。それは小田原にいた鈴木さんという大物とは戦わないためだったのですが、これが先に行つて僕にもいろいろプラスにもなって、鈴木家はもう丸々僕を応援することになったんです。それで僕は、小田原と平塚と拠点を二つ持つて選挙をやるといふ非常に有利な選挙をできることになるんだけど、元をただせば、そういうことがあったんです。

それから、僕が政治生活で一番大きな影響を受けたのは、いとこの田川誠一です。年齢が二十歳くらい離れていたのですが、僕はずっとおじさん、田川のおじさんと言っていたら、おじさんじゃないと言つて怒られました。民政党の中のいい部分を引き継いでいたみたいな感じの人でした。

○紅谷 田川先生は、芯のある頑固な政治家という印象で、自民党国対が全委員会強行採決の指示を出したのですが、社会労働委員長だった田川さんだけは従わなかったという記憶があります。

○河野 物すごく頑固でした。一人だけ絶対強行採決はやらないと言つて頑張つて、そのときの社会党の筆頭理事は田辺誠さんですが、

ここで強行採決をやらなければ順々にちやんと審議はするから、やるなど言っていた。僕は、あの頃、田辺さんと国会の廊下ですれ違つて会うたびに、河野さん、俺らが田川を絶対守るから心配するなと何回も言われたことがあるんです。田川さんもやはり政治家一家で、この人は、朝日新聞を出て松村謙三さんの秘書でした。とても信頼されて、松村さんがやつていた日中間問題を田川さんが引き継ぎました。

○紅谷 そういう政治家一家を支えられたのが先生のお母様ですが、田川家から嫁がれ、お父様は衆議院議員で、お兄さんも県会議員です。それから、やはり政治家一家の育ちだったわけですね。

○河野 私の母の照子は、田川家からお嫁に来たのですが、田川家というのは民政党だったんです。河野家は政友会で、その頃は政友会と民政党は張り合っていたから、そんなところから嫁をもらうということは余りなかったはずなんです。一郎とは見合い結婚です。田川家が、河野一郎と娘を見合いさせるに当たつてあらかじめ河野一郎のことを調べていて、その調べた文書が田川家に残っているのを田川誠一が私にくれました。結構よく書いてあつて、これならもらうだろうというような内容でした。

田川家は横須賀の名家で、そこから嫁に来たんです。だから、田川誠一は私のおふくろの兄貴、つまり長男の息子ですから田川家の跡取りです。母はそういう家で育ち、物静かで絶対外へ出ない人でした。余りべらべらしゃべる人ではなく、僕が酒を飲んで遊んでいたときでも特に何にも言わないんです。私はあなたのことを信頼しているから何も言わないと言っています。父が六十七歳で死んで、母はまだ五十代で未亡人になり、一時すごく落ち込んでいましたけど、俳句を習つたり俳画という絵を習つたりして、晩年はずっと俳句をつくっていました。句集も何冊かあります。とにかく草花を大事にする人で、僕も草花が好きなのは、完全におふくろの影響ですね。

《小学校時代（戦争体験）》

○紅谷 少年時代を振り返っていただきたいのですが、特に小学校時代は戦時中で、いろいろご苦労があったようですが、どんな時代だったのでしょうか。

○河野 私が生まれた昭和十二年は二・二六事件の影響を受けていて、軍部が政治に介入した政党政治が危機の時代でした。昭和十一年から十二年にかけては内閣が脆弱で、軍部の言いなりで首相が決まった。無茶なときに解散させるから選挙に負けて、首相が替わるという政治的に難しい時期でした。そんなときに生まれた私は、父が同僚の政治家のアドバイスを受けて、太平洋上の波、平らかなれということでした。「洋平」という名前が付けられたんです。

父の河野一郎は、昭和七年から国会議員になっていて、僕は河野家の次男なんです。兄と姉がいたんですが、兄が病気で死んで男がいなくなり、昭和十一年の選挙で父が逮捕されていた最悪の状況の中で私が生まれたので、非常に喜ばれたと聞いています。

父は新聞記者上がりで、議員としては生意気だったようです。徹底して官僚や警察、軍部とも喧嘩するものだから、反発を買って物すごい弾圧を受けて、しょっちゅう選挙違反で引つ張られて刑務所に入ったりしていました。

昭和十一年、十二年というのは、政治も非常に不安定で軍部が非常に強かった。昭和十一年の選挙では、あの頃は乱暴で、おやじは選挙中に逮捕されていたから獄中当選なんです。当選したけれども容疑者として警察にいて、警察の中で、おまえ当選したぞなんという時代です。候補者が逮捕されるぐらいだから関係者は何十人も逮捕されて、その当時はやはり相当ひどい拷問があって、自殺する人まで出るという惨たんたる状況だったようです。

僕は神奈川県平塚で生まれ育つんだけど、平塚は軍需工場があ

った上に、湘南海岸から米軍が上陸する可能性もあって危ないというので、小学校三年のときに小田原に疎開しました。だから平塚第一国民学校に入学したんですが、三年から小田原の千代小学校に転校するんです。当時はまだ小田原市ではなく足柄下郡豊川村で、そこへ疎開するんだけど、小学校がなくて隣村の小学校に通ってました。結構遠いところまで通っていたという記憶です。

小学校の頃は、家にも道端にも防空壕があつて穴が掘ってあるだけなんだけど、危ないときはそこへ飛び込むか、橋の下へ潜り込めと言われましたね。

学校では、警戒警報が鳴ると授業を止めて帰れと言われたけれども、家まで結構遠いから、家に着くまでには、大体、飛行機は一度上空に来て、家に着く頃にはもうどこかに行つて終わっているみたいなこともあつたけど、相当怖い思いをしましたよ。今でも仲よくしている小学校の同級生の中には、落ちていた不発弾を拾つて、パンと指を飛ばされた仲間がいます。そういう不発焼夷弾が落ちていたりするような環境でした。

昭和二十年に戦争が終わると普通の学校に戻るんです。それまでは男の先生はみんな兵隊に行つて、女の先生か年寄りの代用教員しかいなかったのが、頑丈な男の先生が除隊して帰ってきたので、先生が相つきつく荒っぽくなったという印象でした。

小田原は田舎ですから、春と秋の農繁期は学校は休みで田植や稲刈りをする。僕ら小学校の三年、四年でも、田植前の田んぼを耕すんです。そのころはトラクターなんかから、馬か牛で田をならす作業、馬の鼻取りというんだけど、馬の鼻の前を捕まえて引き回すのを子供がみんなやっていましたし、場合によっては長い竹ざおで引いたり、そんな作業を随分しました。

田舎の学校だから、稲刈りの前後はイナゴ取りがあつて、学校を挙げてイナゴを捕まえて、それを煮て食料にしたものです。

そして、小学校五年の頃に進駐軍による教育改革があつて、六・三制の義務教育になり、中学が全部義務化されるんです。

○紅谷 その頃は、一郎先生が公職追放になつてた時期ですね。

○河野 おやじは苦心惨たんして、終戦直後に自由党の幹事長になつて鳩山一郎を担いで、戦後第一回目の選挙で勝つたけど、勝つて鳩山内閣を組閣しようという日の朝、公職追放になる。それが昭和二十一年六月で、僕が小学校四年から中学校三年の昭和二十六年夏までの約五年間です。本当に進駐軍による追放というのはひどいもので、一切の公職が駄目だから、その日から給料ゼロだからね。どうすることもできないんです。

おやじは、結局、日魯漁業という会社に世話になるんです。平塚常次郎という人が社長で、どういう縁があつたのか分からないけど、その平塚さんが吉田内閣の運輸大臣で入閣して社長がいなくなつて、おやじは最後は社長までやつたんです。

日魯漁業は、当時は日本とロシアの間のサケ・マスを、国境すれすれで海軍に守られながら捕つたという、相当無茶なことをやつていた。その経験があるものだから、ずっと後の話だけれども、おやじは日ソ漁業交渉に割とすつと入るわけです。

自由党が選挙に大勝して、鳩山一郎が組閣しようと思つたら公職追放。父は幹事長で、全国に候補者を立てていて落選した人もいたから、自分は追放になつたけど、その人たちの面倒を見るわけで、それが公職追放令違反と言われて逮捕されるんです。

○紅谷 そういう中で洋平少年は過ぎされるのですが、少年期ながらも政治や政治家に対する印象はお持ちだったのでしょか。

○河野 おやじの政治活動の厳しさというのを見ていたから、もう政治家は絶対嫌だと思つていたね。僕は生まれていないけれど、選挙違反でおやじが捕まつて、獄中当選という激しい選挙だったという話を聞いていたから、姉と二人で、もうどんなことがあつても父

親に迷惑がかかるようなことはやっちゃいけないという、自分を律するとうか、自分をすごく縛っていましたね。

そのころは優しい少年だったから、政治家はとても嫌だなと思つていました。だけれども、やはり門前の小僧で、政治は嫌だなと思いつながら訪ねてくるお客はほとんど政治家だし、そういう人にかわいがられて、興味はあつたんだね。

《中学・高校時代》

○河野 昭和二十四年に小田原にある私立の相洋中学に入学しました。父親からこの学校に行くように言われ、試験を受けて入ったんです。通学には、まず東海道線の最寄りの鴨宮という駅まで行くんだけど、家からは歩いてたつぷり三十分はかかつて、そこから電車で小田原まで七分、駅からは学校がある小峰の丘まで二十分ぐらい山を登るといふ非常に鍛錬される通学でした。

相洋中学は小田原の小峰山にあつて、その麓にある割と大きなグラウンドで野球なんかしていたのが、二年のときに急に工事が始まつて、あれよあれよという間にそこは競輪場になつてしまつて、授業中にジャンジャンと鐘が鳴ると覗いては怒られたものです。学校の通学路には、焼きイカの屋台があつたり、酔っぱらつたおじさんがいたりする中を通つていたという思い出があるね。

僕は卓球部に入つていて市内の大会に出たりしてはいたけど、ピンポン程度の腕前で余り大した印象はないな。公職追放令違反で逮捕されていた父が入つていた刑務所が、中学校がある山の向こう側にあつて、実際に入つていたのは二か月くらいなんだけど、それが随分嫌だったという思い出があるなあ。

父は、私が中学三年のときに追放解除になり、自由党に復党して鳩山政権樹立に立ち上がるんです。衆議院がいよいよ解散になり選

挙を迎えると、追放になった人達がみんな当選したんです。戦前派の国会議員で割と骨っぽいのはみんな追放になって、その穴が空いたところへまず吉田茂さんが入ってきて、そこへ大蔵省や運輸省のOBを呼んで、池田勇人さんや佐藤栄作さんが来て官僚派ができた。鳩山さんたち戦前派は当選すると党人派といい、官僚派と対峙するんです。そこから徹底抗戦が始まるわけです。

中学三年になると、父から我が家はみんな早稲田なんだから早稲田に行けと言われてたけど、そう簡単に行けるものじゃないので困惑した思い出があります。父は、大学は試験が難しいから高校なら何とか滑り込むだろうという思いだったようだけど、小田原と東京では学力が相当違うからすごく骨を折った。いろいろな先生が来てくれて、ぎゅうぎゅうに詰め込まれて、それで試験を受けて、やっと早稲田に入るところまで辿り着いたんです。

昭和二十七年四月に早稲田高等学院に入って、平塚から通っていたけど、これも結構時間がかかったんです。朝の六時頃の電車に乗って、八時に早稲田の図書館が開くので、別に図書館で勉強するわけじゃないんだけど、いつも一番乗りだった。それは友人のノートを写すために毎朝図書館に通っていたということもあったからね。

高校の途中からは、母と姉と一緒に住んでいた平塚から、目黒で父と一緒に住むようになり、それから父との関係が非常によくなった気がしました。

○紅谷 話が少し脇道にそれますが、河野一郎先生は牧場主で、しかも菊花賞に勝つほどの馬主でもあったようですが、その影響で先生も小学生の頃から競馬場に行くようになって、議長時代もそうでしたが、馬との関わりが生活の一部に組み込まれているようでした。それは、先生とお父様との関係だけでなく、ご子息の太郎先生も、子供の頃は父親と話をするために必死で馬の血統を覚えたというふうに話しておられます。

先生と馬の関わりはどのようなものだったのでしょうか。

○河野 父は公職追放で何もすることがなくて、競馬でもやらないかと誘われて行くようになった。それで一人で行きづらかったのか、僕が中学に入る頃にはよく競馬場に連れていかれましたよ。

おやじを競馬に誘った何人かの人とは僕も随分長く付き合いしました。例えば、横浜の沖仲仕の親分の鈴江繁一さんや明治座の社長だった新田新作さん等、全く世界の違う面白い人たちとの付き合いはその追放中にできたんです。

おやじと僕は年が四十違うし、おやじは政治に没頭しているから、話を合わそうと思うと馬しかなかったんですよ。風呂なんかしょっちゅう一緒に入るんだけど、話すことがないから一計を案じて、馬の話をするれば一番いいというので話していました。

その当時、競馬というのは、その週の出走馬が金曜日になるとガリ版刷りの出馬表に載って、新橋や東京駅の前で売られているのを買いに行くんだけど、それを子供が買いに行くのは気が引けましたよ。でも、その一枚があれば父とは一週間くらい話ができましたね。

○紅谷 今も那須の牧場によく行かれますが、馬というのは先生にとつてどういう存在なのでしょうかね。

○河野 もう癒しそのものですね。

○紅谷 何度か那須の牧場に伺いましたが、牧場に河野一郎先生の部屋を造られて、そこにあるデッキからの景色がいいんだという話をしておられました。河野一郎先生の部屋がそのまま残されているのですね。

○河野 おやじは雷が嫌いだね。ところが栃木県というのは雷が名物だから、絶対に落ちない部屋を造ってほしいと言うから、一か所だけコンクリートで雷が落ちない部屋を造ったんです。もう他は全部潰したんだけど、あの部屋だけは潰すわけにはいかないからそのまま残っているんです。

おやじと馬の話をする切りがないね。

○紅谷 高校時代に話を戻しまして、高校の帰りにお父様の事務所で手伝いをされて、そこで政治家を間近で見えるようになったのとですが。

○河野 父は、日魯漁業が持っていた東京駅の丸ビルに事務所があって、僕はそこに寄ってお茶くみをしていろいろなことを耳学問をしていました。その丸ビルの事務所の秘書が木部佳昭さんと佐藤孝行さんなんです。

○紅谷 その当時は、お父様が自由党内での吉田派と鳩山派との間の対立の中で、党を除名されたり、日本民主党を結成されたりした激動の時期で、政治に対する関心も高かったのではないのでしょうか。

○河野 鳩山一派が自由党に復帰する頃で、父が最も信頼していた三木武吉さんとともに中心的存在でした。事務所には多くの議員が入り入りしていたし、父と立会演説会に一緒に行って、政治の熱気を感じてはいたけれども、自分が政治家になろうという気はなく、野次馬的に興味はあつたくらいです。

高等学院は二年になると理工系と文系とに分かれるんですが、頭のいい人はみんな理工系へ行っちゃう。その次に文系の中の上位十人ぐらいが政経学部へ行き、僕は八番目か九番目ぐらいのぎりぎりの位置でしたが、早稲田大学の政治経済学部に入ることになったんです。

《大学時代》

○紅谷 大学に入学されたのが昭和三十年四月でした。昭和三十年という年は、言うまでもなく自由党と日本民主党の保守合同と左右社会党の再統一があった、いわゆる五五年体制のスタートの年です。一郎先生は保守合同の中心的役割を担われ、また、鳩山内閣の農林

大臣として国政の中心で活躍されるようになった頃ですが、どういう大学時代だったのでしょうか。

○河野 父の政敵だった吉田茂首相が昭和二十九年十二月に造船疑獄で内閣総辞職に追い込まれ、父は、保守合同を推進した三木武吉とともに鳩山内閣を実現させ、農林大臣になって日ソ漁業交渉をまとめ、日ソ共同宣言の締結にも力を注ぎました。また、春秋会つまり河野派を結成したりと絶頂期に入っていくわけです。

僕は大学に入って競走部に入ったんです。別に陸上競技の記録を持つていたわけでもないのだけど、競走部の監督が青木半治さんで、競走部に入るようにと言うんです。高校の頃にちよつと長距離を走った程度なのに、何でそんなことを言われたのかよく分からないんです。

入部しても箱根駅伝のメンバーについていくのは無理で、二年のときに君は主務、サブマネジャーをやれと言われ、四年のときにチーフマネジャーをやっていました。そのころのマネジャーは大変で、金集めも練習場の確保も、みんなマネジャーがやっていたんです。

早稲田の競走部は名門だけれども、ずっと低迷していたのが、僕が三年のときに日本学生陸上競技対校選手権大会で優勝し、さらに連覇して、とてもいい思いをして卒業しました。父も競走部のOBだったので、とても喜んでいましたね。

○紅谷 議長時代によく青木半治さんを訪問されていました、日本陸上競技連盟の会長をされていた方ですね。

○河野 そうです。陸連会長や稲門体育会会長をされて、僕は青木さんから陸連の会長も稲門体育会の会長も引き継ぐんです。

○紅谷 競走部に入られました、早稲田は政治家の登竜門と言われていた雄弁会が有名で、お父様が政治家として絶頂期の頃であり、その後を継いで政治家になるために雄弁会に入るといってお気持ちはなかったのでしょうか。

○河野 そんな気持ちは全然なかったですね。早稲田の雄弁会というのはすごく政治性の強い集まりで、僕は一番嫌だった。僕は雄弁会と応援部は大嫌いだったんです。今は応援部にはお世話になってるけれどもね。

○紅谷 その頃の雄弁会のメンバーには政治家が多いのではないのでしょうか。

○河野 その頃は、もうやや語り草だけでも海部俊樹さん。これがとにかく海部の前に海部なく、海部の後に海部なしと言われて、永井柳太郎以来の名演説と言われていました。そのほか藤波孝生、西岡武夫、渡部恒三、松永光という人達がそうでした。その人達はみんな当時から政治家志望ですよ。その頃、雄弁会のキャプテンいというものは、物すごく壮絶な争いをやってみたいで、キャプテンになるとやはり政界入りのチャンスがすごく広がるというんです。だから、やはり今言った人たちはみんな演説は上手でした。

《社会人時代》

○紅谷 昭和三十四年に大学を卒業されて社会人になられますが、就職先は、お父様が基幹産業である製鉄業を推していたにもかかわらず、御自身の意思で丸紅飯田を選ばれたということですが、今まで進路についてお父様に対してノーと言うことはなかったのではないのでしょうか。

○河野 そうですね。遅ればせながらやつと自我に目覚めてきたんだね。大学時代に競走部のマネジャーとして部を支える仕事をずっとやっていたので、社会人との付き合いが多くなって就職の際にいろいろな知恵がついていたんです。それから、父がそれまでの反主流派で苦勞している間は物を言うような雰囲気じゃなかったけど、鳩山内閣ができて政治の中枢に入るようになって、大臣を経験した

りして多少ゆとりができて、息子が多少何か言っても、まあそうかそうかと言ってくれるような雰囲気が出てきたということもありました。それから、私と父が二人で目黒に住んでいて、非常に関係が良くなっていたということもあったかな。

就職の際に、父は川崎製鉄を勧めてくれたんだけど、僕は外国に行きたいという気持ちが強かったものだから、商社に行きたいと言って意見が違ったんです。父は商社へ行くのは認めてくれたけど、行くなら財閥系ではなく伊藤忠や丸紅という関西系の商社へ行けと言います。父はいつもの体制派に対する反目心からそう言ったのでしょうか、それで僕は丸紅にターゲットを絞って、昭和三十四年四月に入社したんです。

丸紅は本社が大阪で、当時は東京駅から夜行に乗って行くんですが、父が見送りに来たので僕はびっくりしました。父はやはり僕を離すのが嫌だったみたいだね。

丸紅には二年ほどいて、最初の一年は大阪で經理の仕事をしていました。ちょうどコンピュータを導入したときですが、並行してそろばんも使っていた過渡期で、これがなかなか合わないんだ。僕は営業經理という部署にいて、毎日夕方五時になると手押し車で社内をぐるっと一回りして、みんなの売上伝票を集めてきて計算するんだけど、合わなくて毎日夜中までかかりましたよ。

その後、東京へ転勤になって食糧部へ行きました。ちょうどインスタントラーメンが爆発的に売れ始めた時期で、日清のチキンラーメンは他の商社が扱っていたので類似商品を扱ったり、シーズンになると函館に行つてサケ・マス漁船の食料の積込みの仕事をしたりしていました。

そんなことをしているうちに、丸紅には海外研修制度があって、僕はアメリカ西海岸のサンフランシスコ支店に足場を置いて、スタンフォード大学の聴講生になったんです。大学はサンフランシスコ

から車で一時間ぐらいのところにあつて、時々支店に来て報告するという生活でした。

○紅谷 その当時の国内政治は六〇年安保闘争の頃で、岸内閣が退陣し、お父様は池田内閣発足後は主流派になりますが、新党結成に動かれたり大変な時期だったのでないでしょうか。

○河野 アメリカにいた間、日本の政界は安保闘争や浅沼さんが刺殺された頃で、アメリカで新聞を見てびっくりしました。激動の一年、正確には十か月前後だと思いますが、その頃父が春秋会をつくって、春秋会というのは派閥でいうと第三派閥ぐらいなだけけど、どうしてもやはり官僚派にかなわないんだ。それで、じれて軽井沢に集まって新党結成をもくろんだけれど、松村謙三さんから、早まったことをしちやいけないと説得を受けるんですね。

あの河野一郎が、松村さんの話を怒らないで聞いて、最後は説得されて止めるんですよ。それが僕にはどうも不思議でならなかったね。

アメリカ生活は十か月ぐらいで日本に帰ってきたけど、父から、丸紅を辞めて自分が経営している小さな会社で、日本糧穀という穀物を輸入する会社に行くように言われ、そうしました。

○紅谷 丸紅を辞めるように言われたというのは、政治の道へ進む方向が決まったということだったのですか。

○河野 変な話だと思いつつも、まあいいやと辞めたんだけど、少しそういう思いはあったんだろうなあ。父は明らかに自分の後を俺にやらせようと思っていたんだ。僕には武治という兄がいたけど小さいときに死んだから、父にしてみれば僕しかいないと思っていたんだね。四十を過ぎての子供だったので相当焦っていて、早く一人前にしなければという思いだったんだろうなあ。

日本糧穀に入り、ロサンゼルスへ行って穀物の買い付けをしていたのですが、そのときにお世話になったのが日系人のジョージ・ア

ラタニという人で、それからの人生でいろいろな影響を受けました。

○紅谷 ジョージ・アラタニさんは、私もG8下院議長会議でロサンゼルスに行ったときにお会いしましたし、議長公邸にも訪ねて来られましたね。

○河野 そうです。すごく古いお付き合いで、商売しているときの相手だったんですが、ミカサ陶器というブランドのコーヒーカップなんかを作ってホテルなどに置いたり、とてもいい仕事をしておられた。もう亡くなりましたけど、この人には指導もされ、長い期間とてもよくしてもらいました。

○紅谷 日本糧穀のほかに富士スピードウェイでも仕事をされていたようですが、これはいつ頃で、どういう経緯だったのでしょうか。

○河野 日糧と同じ時期です。富士スピードウェイは、父を応援する財界人が集まって話をしているときに、アメリカにNASCARというモータースポーツ統括団体があつて、そこから自動車レースを行うエージェントをもらったけど、年寄りの集まりでよく理解できなくて、何だか訳が分からないうちに、これは若い洋平にやらせようという話になったんです。

富士の裾野に百万坪の土地をリースしてスピードコースを造ったんです。その工事を毎週現場まで見に行つて、でき上がったのは父が死んで僕が選挙に出る半年前でした。落成式の記念レースで死亡事故が起き、亡くなったのが選挙区の人でした。後援会長に呼ばれて、辞めないと選挙にならないと言われて富士スピードウェイを辞めたんです。

○紅谷 選挙の話が出ましたが、この落成式の前の昭和四十年七月にお父様が亡くなりましたが、それまでは政治への思いはどうだったのでしょうか。

○河野 政治よりも商売の方が自分で好きなようにできたから面白かった。だから政治に積極的に関わっていかうという気持ちはなか

つたですね。

しかし、父は明らかに後を私にやらそうと思っていたようでした。父にしてみれば、私しかいないから、早く私を一人前にしなければと思い、日ソ漁業交渉でロシアに同行させて、フルシチョフ第一書記と面会させたり、嫁さんをもらうのを早く進めたりして、僕は二十五歳のときに結婚したんです。

《結婚》

○紅谷 御結婚の話が出ましたので、お父様の勧めで見合いをされたとのことですが、先生が二十四歳で奥様が十九歳と非常に若かったのですね。

○河野 若いんだよね。彼女は全く学生気分で、短大のテニス部で色は真つ黒。テニスの練習の帰りに見合いの場へ現れたほどで、どっちもちよつと冷やかしか気分だったんだ。ところが、翌日に父からどうなんだと言われたから、結構いいんじゃないなんて言ったら、それならすぐ返事をしろと言われた。女性側を待たせるなんてよくない、卒業したら結婚するということでもいいから、とにかく承知したとすぐ返事をしろと言うので、とんとん拍子で結婚が決まって本当に早かった。女房からは、私は何のために結婚して河野家に来たか分からないと死ぬまで言われたよ。二十歳で結婚して、二十一歳で太郎が生まれ、私は本当はもっと青春を楽しみたかったのに、強引に結婚させられてと言っていたな。しかも子供が次々と三人生まれ、さあこれからと思ったら、今度はずっと選挙だと。

○紅谷 披露宴を地元平塚だけでなく小田原でも行ったということはお父様としては自分の跡取りと考えられていたわけですね。

○河野 披露宴は私の顔と名前を少しでも周知してもらおうと思つたに違いないんだよね。東京でも大阪でも行ったので四回やったん

です。女房は、えらいところへ嫁に来たと思つたみたいだね。

女房が育った伊藤家の祖父は、伊藤忠と丸紅の基礎を築いた二代目伊藤忠兵衛さんで、僕はその丸紅の社員だったのに、伊藤忠兵衛というのは歴史上の人物でもう死んでいると思つていたから、女房から忠兵衛さんに挨拶に行ってくださいと言われて驚いたんです。博識で英語をべらべら話し、とても元気でした。女房の父親はその忠兵衛さんの長男ですが、伊藤忠にも丸紅にも入らず、生産会社がいいと言つて呉羽紡績という会社にいたんです。

伊藤家は英国流のスタイルで、父親は会社が終わると家へ帰ってきて、家族が全員テーブルに着いて一緒に食事をするんです。河野家はみんなばらばらで、おやじなんて帰ってくるのはいつも十時か十一時で、男が家で晩飯を食うのなんか絶対駄目だ、外で食べてこいと言ふんだよね。外で食べていると利口になるから、同じ人とはかりでなく違う人と食べて、そこでいろいろな知識を得る。河野家はそういう政治家の家庭で、伊藤家とは全然違うから、女房にとつてはすごいカルチャーショックですよ。

○田中〔衆議院事務局〕 奥様や伊藤家は、先生が政治家になることについてはどうだったのでしょうか。

○河野 絶対反対だったね。結婚するときの伊藤家側の条件は、政治なんかやらないでしょうねという発言が繰り返して、そういうときは河野家側はいつもしんとしていた。

○紅谷 お父様の、政治家たるもの家でご飯を食べるものじゃないという教えは、先生はどうされたのですか。

○河野 僕はその言葉に甘えて従った。女房は、いつもおふくろと二人で食事をしていて、何ということだと本当にびっくりしていたね。

結婚した翌年の昭和三十八年の選挙は、おやじの最後の選挙で、おやじは自分の選挙区には来ないから全部お前がやれと丸々私にや

らせたんです。あの頃は選挙期間が三週間、立会演説や多くの演説会を全部やらされたけど、演説が下手だったから、しゃべればしゃべるほどみんな沈むので、私もさすがにへこたれて、もう落選しちゃうんじゃないかと思いましたよ。

○紅谷 そんな姿を見て、奥様はどう思っていたのでしょうか。
○河野 女房は、これはおかしいと思っていたんだと思うね。でもその頃はおやじは一番上り坂で、年齢もまだ六十五歳で次の総理候補の一人だったし、周りに俺は七十二歳になったら辞めるとか言っていたらしく、まだあと十年くらいはやるだろうとみんな思っていたんですよ。

《河野一郎死去、追悼演説》

○河野 父は建設大臣やオリンピック担当大臣として東京オリンピックの下支えをし、池田勇人総理退陣後は後継総理と目されていたけど叶わず、佐藤内閣では大臣の就任要請を拒否し、その一か月後の昭和四十年七月に大動脈瘤破裂で急死したんです。六十七歳でした。

○紅谷 河野一郎先生を辿っていくと、反主流という時期が長く、安保条約の採決では欠席されたり、新党結成に動いたり、さらには池田内閣退陣後には総理の直前までいかれ、河野先生と非常に似たような経歴だったように見えます。

○河野 おやじからは余り学んでいなかったものだから、もうちょっと学べばよかったのだけど、それでも、ある意味では僕はやはりおやじを引きずっていたね。例えば、おやじが死んだ後の選挙で、僕は選挙中は河野一郎とは一言も言わないとか、当選後は、おやじは農林、建設だけれども、僕は農林と建設は一切触りたくないから文教と外交になったんだよね。だから、いつも、おやじの後はやり

たくないと思いつながら、終わってみると、ずっと同じことをやってた。確かにそうだ。

○紅谷 河野一郎先生が亡くなった昭和四十年七月は参議院選挙中で、その後の国会で追悼演説があり、先生はお母様とお姉様と一緒に初めて国会に行かれました。

河野一郎先生は、家族が政治の場に入ることを余りよしとされなかったようで、先生もそのとき初めて国会に入れ、それからはずっとそこが先生の生活の場になっていくわけですが、初めて国会議事堂や本会議場に入られた印象をお聞かせください。

○河野 初めて行ったときは、石造りの大変いかめしい大きな建物に入って、とても緊張しましたね。

今言われたように、うちのおやじは家族が政治に関わることを好まなかった。例えば選挙中に母親が選挙に関することはほとんどなく、だから母親も国会へ行ったことはなくて、姉と私と三人、追悼演説があるから行ったけれども、本当におずおずとした気分で行きました。

追悼演説は、社会党の河野密さんが行ってくれ、普通は同じ選挙区の相手の政党の人がやるのだけど、社会党の方から、政治キャリアや父の経歴にふさわしいレベルの人を探そうと思うがいいかと予め話があって、河野さんを選んできたんです。僕らは傍聴席の一番前に座って、下をのぞいておやじの席に白い花が置いてあるのが見えました。

○紅谷 お話のように、追悼演説は通常は同一選挙区で他会派の議員が行うという慣例でしたから、社会党の平林剛さんでしたが、まだ当選一回でしたから、社会党の副委員長で同じ朝日新聞の記者、当選回数も近かったのが河野密議員になったようです。

○河野 とても真摯な印象でした。社会党の人の演説というのは、割と少し高調子の演説をする人が多い中で、とても静かだしんみり

聞かせる話しぶりでした。

○紅谷 拍手が鳴りやまなかったようですね。

○河野 そうでした。僕は初めての経験だから、そもそも追悼で手をたたくなんというのはちよつと不思議な気がしたよね。だけれども、随分拍手があつて、それはとてもありがたく、せがれの知らないことも随分話をされました。改めておやじを認識したという感じがしましたね。

○紅谷 追悼演説で本会議場の傍聴席に入られたのが国会への第一歩で、それから二年後には議員席に着かれ、約四十年後に議長席に着かれた。そのスタートでしたね。

○河野 考えてみれば随分昔だね。半世紀以上前か。

《衆議院議員総選挙出馬までの経緯》

○紅谷 いよいよ選挙に臨まれるのですが、選挙に出ようという決断をされるまでの経緯をお聞かせください。

○河野 全然そうは思っていないかったですね。僕は政治家になることに非常に懐疑的でした。おやじの近くで見ていて、政治家には本当に天下国家のことを心配している人と、名誉とか立場に興味があるという人の二種類いるんだと思っていました。

前者は、政治家になつてこういうことをやりたいという目的意識がはっきりしていて、後者は、とにかく当選すればいいというだけで先のことは余り考えていない二種類で、おやじのところに入りまする政治家をそう思いながら見ていて、自分はその前者の方になれるかという自信がなかったし、そうかといって、もう片方ほどつまらないことはないと思つたから、僕は政治家は絶対やりたくないと思つていました。

おやじが死んだ直後は、謙三も私の出馬には反対でした。おやじ

はおやじで、おまえがやる必要はない、政治家はここで終わつてもいいんじゃないかとも言つていました。

もともと、小田原には鈴木一族の鈴木英雄さんという政友会の大物がいたんです。だから、おやじは小田原からは立候補できず平塚から出ていたんです。謙三が私を連れて、一族の鈴木十郎さんという小田原市長に、もう河野家には誰も選挙をやる者はおられませんから、今度は鈴木家でどなたかお出してください。我々河野一族はその方を応援しますと挨拶に行つた。そうしたら鈴木十郎さんは、鈴木家は国政をやるつもりはないので応援しますから、どうぞ河野家で後継者をお探してくださいという話でした。それでも、選挙は大変だから、一時はやらずに済むかなと思つていました。

○築山〔衆議院事務局〕 河野謙三先生も当然その思いを分かつていて、当然次だという思いもあつたのかなという気もするんですけども、鈴木市長にもう引きますよと言われたのは本心だったのでしようか。

○河野 謙三自身は政治がそんなに好きじゃなかったと思う。それでも、謙三という人は言い出したら絶対聞かないからね。

○紅谷 それは、あの参議院議長選挙のときの河野書簡を見ると、そう感じますね。

○河野 議長選挙のとき、絶対、誰が何と言おうと私はやりませんよとか、やりませんとか、謙三はそこはもうすぐきつかった。一郎というのには、言つたけれども新党も断念するし、いろいろなものもぎりぎりのところでみんな断念しているんですよ。そういう割と柔軟性が一郎にはあつただけで、比較すれば謙三にはない。

○紅谷 私も、河野密さんの追悼演説の中で「剛直のゆえに、ときには誤解を招くこともありましたが」という部分から、周りはそう感じていたんだと思つたね。

○河野 結構そこは柔軟なんですよ。

晩年、おやじと何かで話をしておやじはこう言っていたじゃないか、どうしてそれを最後まで頑張らないんだと言ったら、おやじは政治ってそんなもんじゃない、自分の言うことが全部通るなら、それは民主主義じゃない。俺らは百回言って三回か五回通ればそれでいいんだ、あとの九十五回はほかの人の言うとおりにならなきゃ民主主義じゃないじゃないかと言った。そのときはちよつとおやじを見直したね。

僕は政治家になる前に、おやじと話をしておやじも商売も同じようなものだな、いい商品を持っていけば売れるけれども、いい商品じゃなきゃ売れない、みんな同じようなものだから、僕はそのころ商社にいたからそう言ったら、おやじは、そうだけど、政治というものは相手が誰であれ、法律をつくったら、その法律があまねくみんなに公平にかぶらなきゃ、共産党だろうが何党だろうが、全部その法律は同じようにかぶるから、共産党は駄目だとか、あいつは嫌だとか言っていたらできない。君の商売は嫌なやつには物を売らないだろうけれど、政治はそうはいかない。幾ら嫌な人でも、法律を作るときには、全員がその法律によって守られたり制約されたりする。だから、そこは君の言うのと違うんだと言われた。

そんなこともありました。

○築山〔衆議院事務局〕 河野議長御自身は、失礼ながら、かなり剛の部分はあるなという感じはありますけれども。

○甲賀〔河野事務所〕 私は四十年近くお仕えし、まさに、お父上一郎先生、おじ謙三先生のDNAを引き継いで、一見柔に見えますが、最後の最後のところでは本当に剛直だと思います。

○河野 いやいや、それはいろいろ御迷惑かけました。やはり今でもちよつと気にしているのは国会図書館長の人事だけでも、あれはちよつと事務局には迷惑をかけたね。

○紅谷 それは改めてお聞きするとして、それでは、お父様の後を

継がず政治家にならなくてもいいと思っていらいしたのでしょうか。

○河野 そうです。ところが四十九日の法要で、後援会が追悼式をやった後に、それを後援会総会に切り替えると言って、やや出来レースなんだけど、僕の出馬を求める決議をしたので、それを聞いた謙三が、おまえやるかという話に急に変わったんです。

○紅谷 その場には奥様やお母様もいらしたのですね。

○河野 女房も母も聞いていました。最初に思ったのは、おふくろは、おやじが選挙違反で引つ張られたりして、ずっと嫌な思いをしてきたから、きつとおやじが死んでほつとしてるんじゃないか、これで終わったと思ってるのに、また息子が選挙をやるというところ、おふくろがまた苦労するんじゃないか、それが一番心配なところでした。ところが、意外にも選挙をやれとは僕には言われないけれども、弔問に来た評論家の細川隆元さんが、大野伴睦も河野一郎も死んで保守の党人派がみんななくなつて官僚がのさばつて困つたことだと言ったんです。そしたら、おふくろが、またそのうちにいいのが出るでしょうと言言つたんです。それはどういう意味か僕は考え込んで、結局、僕はぐずぐずしているけれど、どうせやるだろうと思ってるんじゃないかと最後は理解して、それで最終的に出ようと腹を決めたんです。

○紅谷 政治家になることに反対だった奥様はどうだったのでしょうか。

○河野 女房は、嫌だとは言わないけれど、やる気はないし当然やらないと思つていたので、だんだん無口になつていくんですよ。

義父へ相談に行つたら、自分の娘が政治家の妻が務まるかをとても心配して、それでも反対はせず二人で相談して決めればいいと言ってますよ。

そこで、二人で考えるために旅行に行こうと言つて那須の牧場に行つたんです。すると女房の方から、もう戻れないんじゃないのと

言われて、こんなことを言わせちゃかわいそうだ、まずかったなと思っただけでも、女房の方がもう腹をくくっていたんだね。最後はしようがないという感じでした。

だから、僕が政治家になるときの動機はとても消極的なんですよ。

○紅谷 立候補すると決められた後、飼料会社と富士スピードウェイの会社はどうされたのですか。

○河野 もう借金も全部返して整理しました。富士スピードウェイは、そんな簡単じゃなく随分いろいろあつたけど、三菱地所へ引き取ってもらいました。

日糧については、私の仲人をしてくれた鈴木九平さんという日本水産の社長だった人が、社長から何からみんなやってくれるということになったので、仕事を全部辞めて選挙に出ることになったんです。

○紅谷 そういう経緯でお父様の後を継ぐ決断をされるわけですが、選挙では地盤、看板、カバンがあるかないかと言われ、世襲政治が批判されていきましたけれども、その善し悪しはどうお考えだったでしょうか。

○河野 これは、人間というものは弱いもので、自分の得というものは余り気がつかない。損なところは気がつくけれども、得なことには余り気がつかないんです。世襲批判が出て初めて、ああ、そうか、やはりちよつと恵まれ過ぎているというか、そういう感じは持ちました。

昔は今ほど多くなかったように思うけど、最近はずつと多いですよね。

政治家というのが職業になっちゃったんですよ。マックス・ウェーバーは「職業としての政治」と言っているけれども、僕が一番教えを受けた政治家で鯨岡兵輔さんという人は、履歴書の職業欄に代議士と絶対書かず無職と書く。無職はないだろうと言うと、政治家

は職業でやってはならぬ、俺は職業としてやっているわけではないと言っただけの人でした。ちよつと浮世離れしているかもしれないけれども、僕もかなりそれは納得するところがありました。

だから、職業として政治家をやると、後継者、跡取りみたいなものを取っておやじがつくって、何にも職業に就かないで秘書になつておやじの後をやる、そういうのはどうかと僕も思いますね。

逆に息子はやっちゃいけないのかと言われると、それはやはり息子には息子の職業選択の自由はあるわけだから、ちゃんと自覚があつて政治をやるんだという意気込みで、勉強もしてやるというなら別にやっちゃいけないとは思いません。

僕自身も最終的には政治家になつたけれども、大学を卒業して会社に入ってサラリーマンを経験した。太郎も政治家をやりそうだとは思っていたけど、おやじの秘書なんか全然やる気はなく富士ゼロックスという会社へ行つた。

僕は、政治家というのは理想を持つかどうかで、理想のない政治家は駄目だと思つているんです。だけれども、そう言つて随分叱られ、おまえは駄目だ、上向いて理想だなんて言っているからるくでもない、やはり政治家というのは現実を直視して現実の中でどうするかを考えるべきで、理想なんて駄目だ意味がないと言うので、僕は何人とも大げんかした。僕は、理想を持ってその理想に少しでも近づこうとか近づけようと思つてやるのが政治家じゃないかなと思つていたんです。

選挙への出馬は、おやじが急に死んで、やる以外にしようがないからやったという事情があつたけど、理想がないなら政治なんかやる価値がないと思つていて、その上で選挙に出ることにしたんです。

《選挙運動》

○紅谷 いよいよ選挙に出る決意を固められますが、いつ選挙があるか分からない中、選挙まで一年半ほどの期間がありました。

○河野 その頃の自民党はスキヤンダルばかりで、荒船清十郎運輸大臣が急行列車を地元で止めたとか、上林山栄吉さんが自衛隊の飛行機で選挙区へ行ったとか、そんな話が毎日のように続いて、最後は黒い霧解散という名前が付けられた選挙でした。現職はみんな駄目で全部新人に総取っ替えなんて言われていたのが、そのうち自民党が全部駄目という話になっていったんです。

神奈川第三区は五人区ですが、おやじが死んで、現職は春秋会の木村剛輔、小金義照、安藤覚の三人が手を挙げ、それと僕で自民が四人出るわけです。一方の野党もみんな強いんですよ。

自民党にとつては厳しい選挙で、とにかく僕が選挙期間中に訴えたのは政治改革です。政治を全部変えなきゃいけないという話で、もうめっちゃくちゃなんだけど、自民党も何もない、現職はみんな駄目という演説をしていましたね。

○紅谷 あの黒い霧解散の際は、前にも後にも例はありませんが、国会に補正予算が提出されて、衆議院の予算委員会も本会議も、参議院の予算委員会も本会議も、全部自民党単独、しかも一日ずつの審議、その上での解散ですから、自民党にとつては非常に不利な選挙だったと思います。

○河野 そうでしたね、佐藤内閣です。神奈川県第三区は定員五人で、自民四、社会一だから、そこから出ることはとても荷が重いことでした。

自民党の神奈川県連が僕を公認しないと言うんですよ。現職の三人が公認は三人でいいじゃないかと言ひ、僕は公認にならないというんですよ。でも、やると決心した以上は、非公認でもやらなきゃ

いかぬと思っただけど、最終的には公認になったんです。

それは、候補者の一人だった安藤覚という人が、洋平君は一郎さんの後継者なんだから公認しないのはおかしいと言ってくれて公認になったんです。ところが、その安藤さんが落選したんです。

○紅谷 昭和四十二年の選挙は、公明党が初めて出てきた選挙でしたし、神奈川三区というのは、野党は強固な地盤を持った人が多かったのではないのでしょうか。

○河野 そうです。社会党は総理大臣だった片山哲を輩出した地で、平林剛、加藤万吉、民社党は国鉄常務理事の河村勝、共産は内野竹千代、公明党は小浜新次というお相撲さん。だから野党も結構強くて、選挙結果は自民党の当選は自分一人で、自民一、野党四になった。県連へ行ってもどこへ行ってもみんな機嫌が悪くて怒られましたよ。

○紅谷 当時の神奈川県選挙区は三区までで、一区、二区は、横浜や川崎という都市部。三区は、それ以外の非常に広い地域で、東京の通勤圏の地域もある一方、農業や漁業が中心の地域もあって、幅広い支持が求められる選挙区で、選挙運動は大変だったのではないのでしょうか。

○河野 そうなんです。いろいろな業界をバックに、いろいろな人が出ていました。

今言うように、神奈川県を三つに分けているんだけど、一区は横浜だけ、ここは藤山愛一郎とか、まさに都市型の人が出た。二区は川崎と横須賀、これは間に横浜が入って飛び地の、繋がっていない変則だけれども、二つの市が第二区。それ以外が全部第三区なんです。

ですから、すごく面積も広いんですね。北は東京と山梨県に隣接し、西は静岡県に隣接して、湘南海岸。そういう物すごく広い選挙区で、東海道線がその中を突っ切って、それから小田急線、この二

本が動脈ですね。

僕は平塚で、小田原、平塚というのは東海道線沿線ですから、どつちかというところと東海道線沿線が地盤。小金さん始めほかの人はみんな農村部を走っている小田急線沿線なんですよ。

社会党は、平林剛さんが富士フィルムの労組、もう一人の加藤万吉さんは国鉄労組。民社党の河村さんは国鉄のOB。そこへ小浜新次さんが出てきたわけです。四十二年の選挙の時は、公明党が全国一斉に候補者を出したから、どのくらい獲るかわからないし、どうなるのか、これが一番不気味でしたね。

○紅谷 本場に広い選挙区で、幅広い支持が必要だったかと思いますが、応援弁士には多彩な人がいらしたようですね。

○河野 余り国会議員に応援してほしくなかったけど、それでも何人か押しかけて来て、それは当選したら俺の派閥に入れという青田買みたいなもので、中曽根さんは頼まないのに来て演説していたし、もう片方の森清さんも来た。それから佐藤栄作さんも一度は来ましたがね。だけれども、そういう政治家の応援よりも、別の世界からの応援が嬉しかったですね。

やはり何と云ったって圧倒的に人が集まったのは長嶋茂雄さんでした。これはすごかったね。僕はファンではあったけれども長嶋茂雄という人をほとんど知らないんですよ。僕をとて支持してくれたいベースボール・マガジン社の池田社長がお願いしてくれました。長嶋さんが宣伝カーに乗って長嶋だと言ったら、うわつと子供が車を取り巻いて動けなくなるんです。それでサインしろというわけです。三か所ぐらいやりましたが、どこへ行っても、ものすごい子供で驚きました。長嶋さんの演説は、幼なじみの河野ヨウイチ君がとか、次へ行くと、ヨウゾウ君とか言っていて、名前が違うんですよ。彼は全然意に介さない。それでも、とにかく大変な人を集めて、知名度が上がったことは間違いないですね。

○紅谷 女優の藤村志保さんと坪内ミキ子さんも応援に来られたと聞いています。

○河野 当時「三姉妹」というNHKの大河ドラマをやっていて、藤村さんはそれに出ていたんです。藤村さんと坪内さんは、二人とも大映の女優さんです。永田雅一という大映の社長が、俺がおまえの応援はできないから、うちの女優を代わりにやるからと言いつつ、それで来てくれたんです。藤村さんは選挙区の愛川町という町の人、坪内さんは早稲田の後輩ということになってくれ、二人ともとても人氣がありましたね。

応援の中で助かったのは、三門博さんという浪曲家です。おやじが浪花節が好きで、三門さんの浪曲のすごいファンだった。浅草の国際劇場で浪曲大会があると行こうと言われ、僕はまだ高校生だったから浪曲大会に行くのはちょっと辛かったけど行っていいんです。この人はとても律儀な人で、おやじが死んで僕が選挙に出るといふ話を聞いて、洋平さんが選挙をやるなら私が手助けしましょうと言ってくれた。僕の選挙区では三回ぐらい浪曲をやりましたね。そうすると、これは長嶋さんと逆でお年寄りがいっぱい来るんだよね。お年寄りは全く僕らには手のつけられない層だったので、たくさん集まってくれてすごく助かりましたね。

それから、あとは陸上競技の先輩で、田島直人さんや西田修平さんというオリンピックの往年のメダリストが何人か来てくれました。この人達は、演説なんでものじゃなくぼそぼそしゃべるだけだけど、来てくれただけで選対の陣営のテンションが上がるんです。当時は選挙期間が三週間だから何回か空気が沈滞する。そういうときに来てくれると一気に盛り上がるから、それは助かりましたね。

さらに、栃ノ海という横綱。小さな横綱で余り強くなかったかもしれないけど、おやじがひいきにしている、彼は引退していたけど選挙応援に来てくれました。